6年生1人、4年生2人、3年生5人。計8人の全校児童

特集 紡がれる「ことば」

―小規模校・木細工小学校の取り組み―

昨年の国民文化祭「現代詩（ことば）の祭典」で4人の児童が入賞した木細工小学校。小規模校である同校では、20年以上前から詩や作文に力を入れた指導が行われています。その取り組みを紹介します。

賢治ゆかりの地より

かつて市内を旅した宮沢賢治。江刺区米里も訪れていて、詩「人首町」や童話「種山ケ原」などから体験の様子などがうかがえ、ゆかりの地であると分かります。そんな賢治の作品「風の又三郎」と関わりが深いとされるのが木細工小学校。旧校舎が物語の舞台となったといわれています。

米里の木細工小学校は、市内で一番東に位置する小学校で、種山高原の西麓に位置します。29年度の生徒数は8人、複式学級の小規模校です。このように小さな学校ですが、優れた実績により全国に名を轟かせています。その活躍こそが、詩と作文なのです。

取り組みのきっかけ

以前から、児童数が少ないことが課題だと考えられていた木細工小学校。進学して同級生などが大きく増えれば環境が激変しますが、児童数が少なかったことで子どもたちが気後れしないようにと、いくつかの取り組みが進められてきました。それは太鼓の演奏であり、作文に力を入れることでした。しかし作文については、昔から対外的な発表を重視していたわけではありませんでした。

多くの受賞を得ることのきっかけとなったのは平成4年のこと。胆江地区では、地区内の児童の作品を集めた詩集「いさわ・えさしの子」が作られていたのですが、その中に収録された木細工小の児童の作品が「土井晩翠児童賞」の栄誉に輝いたのです。当時、木細工小の教諭だった山崎ヨシ子さん（73）は「当時も児童の数は15人に満たないくらい。そんな学校だったのに賞をもらうとは、みんなびっくりしました」と振り返ります。

タイミング良く、その翌年に県内で国民文化祭が開催。県下の小学校には「詩部門」への作品応募が呼びかけられ、木細工小もこれに挑戦することに。そして、木細工小の児童は第8回国民文化祭いわて「詩部門」で、文部大臣奨励賞、岩手県知事賞、県実行委員会長賞を受賞したのです。

この実績に、児童はもちろん、教員も確かな手応えを得ました。その頃の木細工小では集団での行動を通じて一人一人に自信を持たせようと太鼓の指導にかなり力を注いでいたのですが、当時の菅原鐵郎校長は「人数が少ないからこそ個々の指導に力を入れるべき」と考えを転換。こうして、木細工小の取り組みは新たな局面を迎えたのでした。

山崎ヨシ子さんは10年ほど木細工小に在籍。詩や作文の指導も務めました

平成6年には、福岡県柳川市で行われる「白秋献詩」に応募。学校に案内が届いたから応募したというこのコンクールでは、文部大臣奨励賞を受賞します。以降、作文のコンクールなどにも積極的に応募し、数多くの賞を受賞するようになったのです。

経験を大切に

詩への取り組みが始まったころは、週一回、2時間目と3時間目の間の20分ほどが指導の時間。山崎さんがまず取り組んだのは、詩の書き方ではありませんでした。「例えば春に新芽が萌える山は緑といってもいろんな色の違いが

主な受賞

木細工小学校では、詩は主に「国民文化祭」と「白秋献詩」に、作文は「ごはん・お米とわたし」と「JA共済児童生徒作品コンクール」に応募しています。

平成5年以降、国民文化祭では62作品が入賞、白秋献詩では78作品が三席以上に入賞。ごはん・お米とわたしでは全国優秀賞などに15作品、JA共済児童生徒作品コンクールでは金賞などに18作品が輝いています。

正面玄関前には、在校生の賞状などが飾られる